

4 世紀から 12 世紀ヨーロッパの聖俗関係について

141-821706-0 松山和弘

2022 年 5 月 15 日

800 年 12 月 25 日に、カール大帝は教皇レオ 3 世からローマ皇帝の冠を受けた。皇帝の戴冠を教皇が行うことで、型式上、皇帝 (世俗権力) は教会への従属することとなった。また、これが東方教会とは異なる西方教会の独自の方向性となった。その後、ミサの典礼文の変更や、ローマ司教首位の扱いなど西方教会と東方教会の差異が問題となり、1054 年に東西教会の分裂となった。

聖職者が権力を持つようになったが、11 世紀頃までに腐敗が進みシモニア (聖職売買) や、聖職者の妻帯が行われるようになった。

これに対し、まず世俗権力のハインリヒ 3 世によるシモニア改革が行われ、シモニアに関わった教皇 3 名が退位させられた。

世俗の権力者が教皇の人事をおこなったことに対する批判が、グレゴリウス 7 世らによる、教皇改革 (教皇の選挙制度改革、教皇庁への権力集中、叙任権闘争) へとつながっていき、今日まで続く教会法の整備や教皇の選挙制度が確立する。教皇の選挙制度 (コンクラーベ) は、世俗の権力からの介入を阻止する仕組みとして興味深い。